

所属・資格 総合文化研究室・准教授

申請者氏名 土屋 弥生

研究課題		人間科学の方法と教育実践研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	近年、教育現象に関する研究における理論と実践の乖離について様々な立場から議論が行われている。この問題の有意義な議論のためには科学論的観点からの検討が不可欠である。本研究では教育現象に関わる問題を、まず自然科学と社会科学の観点から検討し、さらにそこで明らかにされた特徴を自然科学的方法と人間科学的方法という研究方法論の観点から検討をおこなった。本研究の課題は次の通りである。①自然科学と社会科学における客観性の問題②自然科学の方法と人間科学の方法の相違③教育現象研究における人間学的方法の意義④教育現象研究における現象学的方法の適用
	研究の結果	科学としての教育学の現状を把握するために、「自然科学の方法と教育学」および「人間科学の方法と教育学」の関係について検討をおこなった。その結果、教育活動の基盤となる児童生徒理解においては人間科学的な視点が前景に現れ、現象学的・人間学的方法を用いたパトス分析が出発点とならなければならないことが成果として得られた。授業や生徒指導などの教育活動に関わる実践的研究は、現象学的・人間学的方法により得られた知見を中心に据えて、外部視点に立つ社会や制度などに関わるさまざまな科学領域の知見がそれらを補うかたちで行われるときに、本来の実践性を持つことになるという結論に至った。
	研究の考察・反省	研究を遂行する中で、教育実践研究における「内的生活史」の重要性が明らかにされた。精神医学において現象学的方法を取り入れたビンスワンガーは、患者個々の「史実」の確認によって逐次的に立証しうる外面的な出来事の叙述ではなく、より内面的な意味連関として、換言すれば人生のプロットとして直観に一挙に開示されるような「内的生活史」の重要性を指摘している。この内的生活史に着目することによって、発見的的手法としての現象学的本質直観による構造分析と人間学的な通時的視点に基づく考察によって患者の全人的な事態が理解されるのである。これらの直観診断と生活史診断の方法論はわれわれの教育実践における実践的指導力の問題圏や教育実践研究のあり方を考える際においても非常に示唆的である。現場の教員は、児童生徒をまさに直観的・即興的に把握することができなければならない。もちろんここでは、背景として児童生徒の内的生活史に関わる情報が機能していなければならない。今回の研究では着眼点の一部を示したが、今後引き続き詳細を検討する必要がある。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>研究成果物 「人間科学の方法と教育実践研究」 日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』第99号 (令和2年2月) 日本大学文理学部人文科学研究所</p>	